

# シロナガスクジラ 南極海・南半球

Blue Whale, *Balaenoptera musculus*



Photo by F. Kasamatsu

南極海での通常型シロナガスクジラ (Photo by F. Kasamatsu)



Photo by H. Kato

オーストラリア南岸沖を泳ぐピグミーシロナガスクジラ (Photo by H. Kato)

## 管理・関係機関

国際捕鯨委員会 (IWC)

## 利用・用途

刺身、鯨油など

## 最近の動き

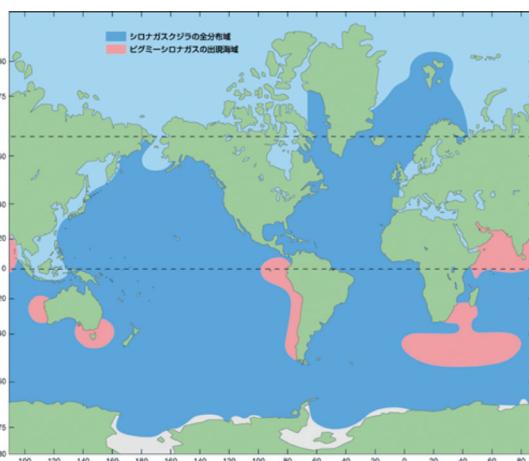
本系群をめぐる大きな動きはない。2015 年の IWC 科学委員会では、将来の資源評価に向けて、南極海の系群構造に関する知見、資源量等のトレンド情報の有無、今後の作業の優先順位付けなどが主体に議論され、来年度も引き続き議論が継続されることとなった。

## 漁業の特徴

本系群は、南極海における近代捕鯨（捕鯨砲を使った捕獲）がノルウェーによって開始された 1904 年から主要な対象種として捕獲された。その後、1924 年に誕生した母船式捕鯨により漁場が拡大し、1920 年代後半～30 年代に捕獲の隆盛期を迎える。1930/1931 年漁期には史上最高の 41 船団（ノルウェー、イギリス、オランダ、ソ連、南アフリカの 5 カ国）が出漁して捕獲数のピークを記録した。日本も 1936/1937 年漁期から南極海捕鯨に参入した。その後、第二次大戦中は停滞したものの、戦後間もなく復興し、これらの国々によって捕獲が続けられた。大型鯨類捕鯨業の管理は、第二次大戦以前はなされていなかった。大戦以後、IWC によって BWU 単位制度（シロナガスクジラ換算制度）が導入され、本種の産油量を基準に各鯨種の捕獲頭数が定められたが（1946～1971 年）、資源状況の悪化に伴い、1964/65 年漁期から南極海における本種の捕獲が禁止された。さらに 1982 年に IWC で商業捕鯨モラトリアムが採択され、以降、全海域における本種の商業捕鯨が停止されている。

## 生物学的特性

- 体長・体重：20～34 m・80～190 トン
- 世界に 3 亜種：南北の各半球の通常型、南半球の矮小型ピグミーシロナガスクジラ
- 寿命：110～120 歳
- 成熟開始年齢：10 歳頃
- 繁殖期・繁殖場：冬・低緯度海域
- 索餌期・索餌場：夏・南北洋
- 食性：オキアミなど
- 捕食者：シャチ



通常型（青色）、ピグミーシロナガスクジラ（桃色）の分布図

## 漁獲の動向

1910 年代～1920 年代前半は、南極海で年間数千頭レベルの捕獲が行われていたが、1920 年代後半に 1 万頭を越えて急増し、1930/1931 年漁期には過去最大の 28,325 頭を記録した。1940 年代前半の第二次大戦に伴う減少、休漁の後、捕獲が再開し、1940 年代後半～1950 年代初めは 5 千～8 千頭が捕獲された。その後、資源の減少に伴い、捕獲数は減少し、1960 年代初めには亜種のピグミーシロナガスクジラを合わせても千頭前後にまで減少した。1964/1965 年漁期以降は捕獲が禁止された。

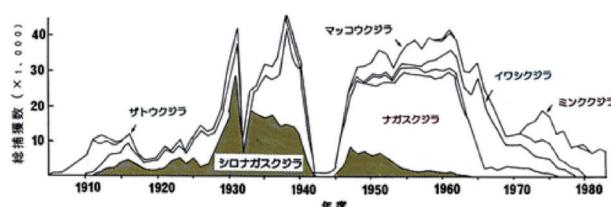
資源状態
本系群は最も資源が減少した系群の一つである。2008 年の IWC 科学委員会において、本系群の包括的な資源評価が実施され、1904 年時点の初期資源量は 256,000 頭、と推定され、1971/72 年までに 395 頭（初期資源の 0.15%）まで減少したこと、以降は年率 6.4% で増加し、1997 年時点の資源量は 2,280 頭（初期資源の 0.9%）であることが合意された。捕獲停止後約 50 年経過したが、資源量は初期資源の 1% 以下のレベルに過ぎず、資源水準は依然として極めて低いと判断される。資源の回復が進んでいない要因には、同じ餌種を利用するなど、本系群と生態的競合の関係にあるクロミンククジラの台頭もあると考えられており、本系群の回復に向け、鯨種間の競合関係を更に明らかにする必要がある。

資源評価のまとめ
■現在の資源量は初期資源量の 1% 以下のレベルであり、極めて低位。
■資源動向は年率 6.4% で増加。

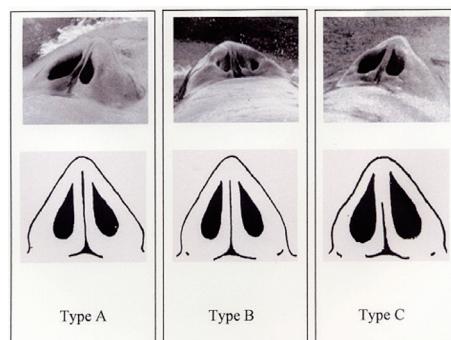
管理方策
IWC により商業捕鯨のモラトリアムが継続されている。IWC は管理対象資源の包括的資源評価を実施している。本系群については、2006 年から同作業が開始され、2008 年に開催された同年次会合において終了した。また、IWC において 1996 年から実施されてきた本系群を含む大型鯨類を対象とした南大洋鯨類生態総合調査 (SOWER) による目視調査が、2009/10 漁期の調査をもって終了した。2015 年の IWC 科学委員会では、今後の資源評価に向けて、系群構造に関する知見、資源量等のトレンド情報の有無、今後の作業の優先順位付けなどが主体に議論され、来年度も引き続き議論が継続されることとなった今後の本種の資源評価には、日本の南極海調査で副次的に得られる本種の分布、個体識別データの活用による貢献も期待される。

管理方策のまとめ
■捕獲停止の継続。
■さらに資源が回復すれば、低水準資源からの回復と利用と保存の両立の実例となりうる。
■生態的に競合する鯨種間の関係の解明がさらに必要。

シロナガスクジラ（南極海・南半球）の資源の現況（要約表）	
資源水準	極めて低位
資源動向	年率 6.4% で増加
世界及び我が国の捕獲量（最近 5 年間）	なし (商業捕鯨モラトリアムが継続中)
最新の資源評価年	2008 年
次回の資源評価年	未定



南極海母船式捕鯨によるシロナガスクジラの捕獲頭数の変遷  
(加藤 1991)



亜種	頻度		
	TypeA	TypeB	TypeC
ピグミー	17	7	1
シロナガス	0	12	0
Chi-square	Chi-square=16.8253, P=0.00002		

シロナガスクジラとピグミーシロナガスクジラの鼻孔形態の亜種間比較